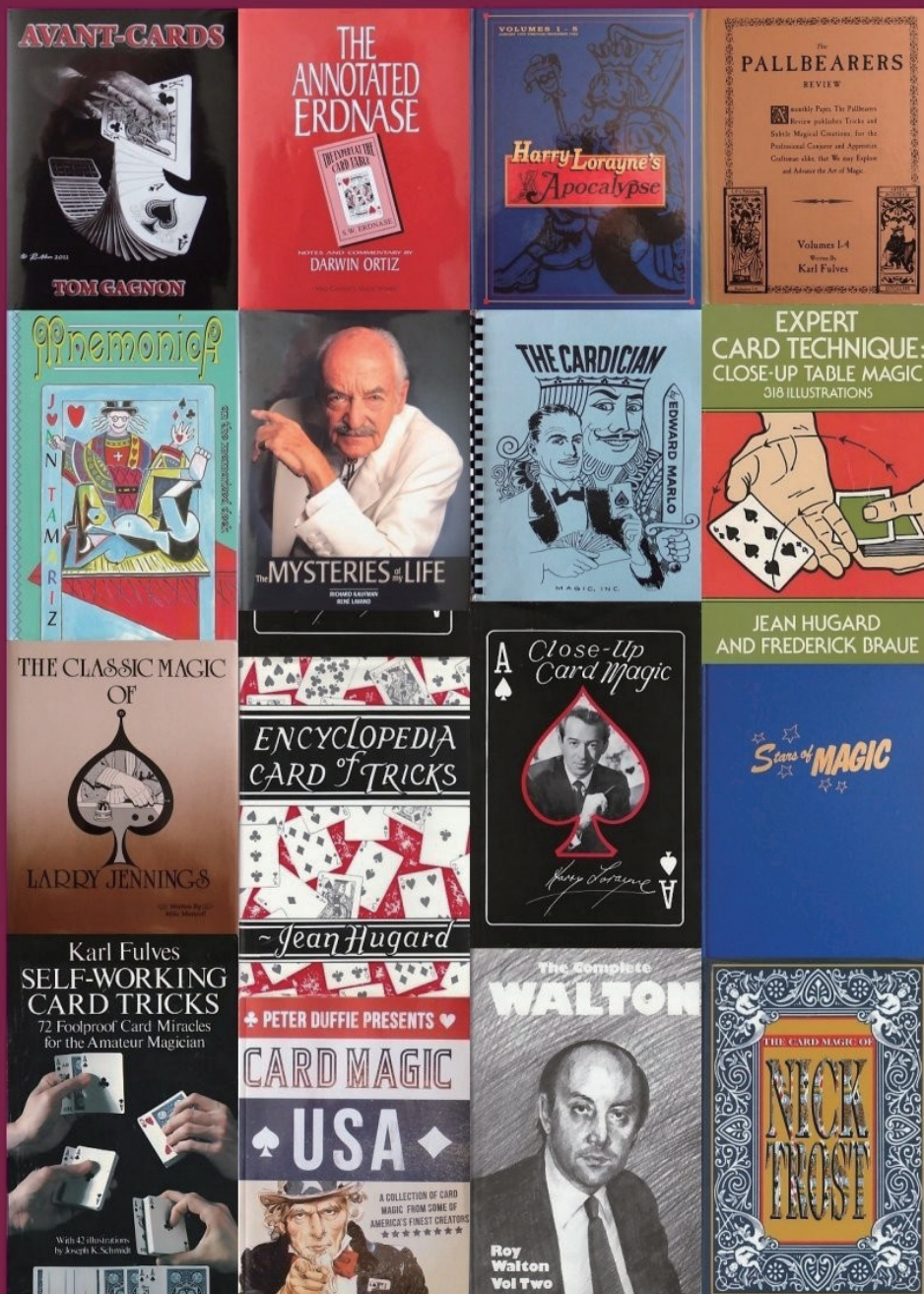


Card Magic Magazine



No.12

April 7, 2013

by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

ストップカード

ローレンス・バーロウは、雑誌“スフィンクス”、1918年4月号につきのように書いています。

客がストップをかけたところから選ばれたカードを現す方法で、もっとも古くからある方法はつぎのようなものです。選ばれたカードをボトムにコントロールします。デッキを左手に持ち、右手の指先でトップカードを手前に引いてずらしします。カードの長さ半分ぐらいたずらすのです。

つぎつぎとずらしていき、ストップがかかったら、ずらしたカードを右手で取るときに、右親指でボトムカードをいっしょに取ってしまいます。そして取ったカードをひっくり返し、いちばん下にある選ばれたカードを見せます。

バーロウは“もっとも古くからある方法は”と書いているだけで、出典を示していませんでしたが、のちにフォースについて調査するうちに、プロフェッサー・ホフマンが“モダンマジック”(1876年)の中で、フォースの方法として書いているのを見つけました。

このトリックに使われている原理は、'ストップトリック'を実現する原理としては、初期の作品に多く見られるものです。原理の定義としては、“ストップされた位置に密かに目的のカードを運ぶ”とするのが妥当でしょう。このあと解説するライブチヒの方法や、'クリストストップ'と呼ばれるものもこの原理によります。

この原理には、初めからストップがかかる位置に目的のカードを置いておく、という変形も含まれます。グライドを使って演じるようなものです。今回、グライドを使用したバージョンを見つけようとしたのですが、奇妙なことに見つけることができませんでした。

第2番目の原理は、ストップされたところにあるカードを目的のカードとすり替えるという原理です。私の作品'あなたのひらめき'は、この原理を用いていることが明白ですが、あまりこの原理を使用したものを見ることはできません。

第3番目の原理は、心理的なストップがかかりそうなタイミングで、目的のカードをディーリングする、もしくは目的のカードの上で指を止める、と言ったものです。この原理の中には、“ストップがかかりそうなタイミング”ではなく、“ストップがかかるわかっているタイミング”を利用するものも含まれます。

それらの意味は、それぞれの作品を読んでいただければ、理解していただけるはずです。

ユビキタスカード

＝ ナート・ライブチヒ、"アートオブマジック"、1909年＝

これはナート・ライブチヒがレパトリーとして演じていたものだそうです。トリックの構造だけを説明するのは数行で済んでしまいましたが、名手ライブチヒの演技の雰囲気をお伝えするために、原文を忠実に翻訳しておきます。

シャフルされたデッキを左手に持ち、相手に前エンドを持ち上げさせて、1枚のカードを見ておぼえさせます。そのカードの下にブレイクを作りますが、まだそのカードを移動させません。

2人目の客に向かおうとして体の向きを変えるとき、ブレイク上の1人目のカードをスリップさせてトップに運びます。そして2人目の客にも同じようにカードをおぼえさせ、3人目の客に向かうときにそれをトップに運びます。3人目のカードをトップに運んだあと、トップの3枚が保たれるようなフォールスシャフルを行います。

デッキをテーブルに置き、トップから2、3枚ずつ取って左手に置いていきます。最初だけは必ず3枚取ります。1人目の客に好きところでストップをかけてくれと言いますが、それまでに4、5枚取っておきます。

ストップがかかったら、右手をポケットにかけますが、そのとき左薬指でボトムカードを右に押し出し、この章の初めに解説した方法で、右手の指先と親指の先で押し出したカードをつかみ、カードをそろえる動作でそのカードをトップに運びます。

その動作をカバーするため、「あなたは好きところでストップをかけましたよね。このカードはストップがかかったところのカードです」というようなセリフを言いながらやります。「このカードは」と言うとき、右手でポケットのトップカードをたたきながら言います。しかもそのカードを少し押し出しておきます。

「もしもこれがあなたのカードなら、私のマジックは成功です。あなたのカードは何でしたか。ダイヤのQですか」というやり取りのあと、トップカードを表向きにして、当たったことを示します。

いまあと2人のカードはポケットのボトムにあります。それらをトップに移す必要がありますが、パスでやってもよいですし、オーバーハンドシャフルでトップに運んでもかまいません。それからそのポケットをテーブルのポケットの上に重ねます。同じやり方であと2人のカードを当てます。

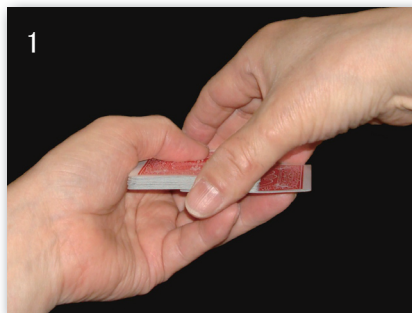
* 備考 * (加藤)

カードをそろえる動作でボトムカードをトップに移すのですから、テーブルから取って左手に置くとき、きれいにそろうように置くのではなく、わざとずれた状態に置くべきです。

1人のカードを現したあと、左手のボトムからトップに移し、それをテーブルのポケットに重ねるしていますが、そのままテーブルから取り続けてつぎのカードを現してもよいと思います。それには数枚ずつ取るのではなく、1枚ずつ取った方がよいと思います。数枚ずつ取ること自体があまり見かけのよい動作とも思えません。

解説中に、“この章の初めに解説した方法で、右手の指先と親指の先で押し出したカードをつかみ”、と書かれていますが、解説されているその技法はつぎのようなものです。ネルソン・ダウンズが考案したと書かれています。サイドスチールのように、抜き出したカードを完全にパームするものではありません。

押し出したカードの上エンドの右近くを小指の先、下エンドの左コーナー近くを親指の先でつかみ、図1、そのカードを右に抜いてトップに運びます。



ストップウェンレディ

= ヘンリー・クリスト、雑誌“ジンクス”、1940年1月6日 =

“ラリー・ジェニングスのカードマジック入門”に解説の‘ストップカード’は、ヘンリー・クリストの作品であると書かれていますが、ハンドリングはほとんどクリストの原案どおりであるものの、かなり原案と違っている部分があります。参考までに、雑誌“ジンクス”で発表されたクリストの原案をお読みください。

* 方法 *

相手に選ばせたカードをトップから2枚目にコントロールします。「心の中で20までの数を思ってください。カードを1枚ずつ表向きにしていきますので、あなたの思った枚数目のカードを表向きにする寸前にストップをかけてください」と言います。

トップカードを表向きにしてトップにそろえ、「このカードはあなたのではないですよ」と言います。相手が返事をしようとしているとき、ダブルリフトしてトップの2枚を手前に3cmほどずらします。図2。



「このカードが1枚目です」と言って、ずらしたカードを指さします。いまデッキのトップには2枚のカードが手前にずれてのっけていて、上が表向きで、下が裏向きの相手のカードです。

デッキの前端の裏向きのカードが見えている部分で、2枚目のカードを引き出して表向きにして、すでに表向きにしているカードの上にそろえて「2枚」と数えます。そのようにしてつぎつぎと数えながら表向きにして置いていき、相手がストップをかけるまで続けます。

ストップがかかったら、表向きにしたカードを裏向きのカードにいったんそろえます。そして表向きのカードを広げ「この中にはありませんね」と確認します。そして表向きのカードを全部どけます。そして現在のトップカードを指さし「これがあなたの選んだ枚数目のカードです。あなたのカードは何でしたか」とたずねてから、そのカードを表向きにして見せます。

* 備考 *

ダブルのカードを長い時間見える状態にするのを避けるため、ダブルのカードを置いたあとすぐにつぎのカードを表向きにしてダブルカードの上にほんの少し前にずらしてのせれば、ダブルカードの前端をカバーできます。

“ラリー・ジェニングスのカードマジック入門”に書かれた方法では、たんにカードを表向きにしていくときにストップをかけさせていますが、上記の原案では、先に数を思わせて、その枚数の1枚手前でストップをかけさせています。そのことが、重要なカモフラージュの布石となっているのです。

このマジックの弱点は、表向きにしたカードをいったんデッキにそろえ、それからカードを広げて取る、という動作が不自然なものであることです。クリストのやり方では、「この中にはありませんね」というセリフを言いながらカードを広げることが、「いちどデッキにそろえたカードを広げて取る」、という不自然さを和らげる働きをしています。

私が“ラリー・ジェニングスのカードマジック入門”に書いたやり方は、その点の配慮がされていませんでした。せめて表向きのカードを広げるときに、「あなたはどのカードでストップすることもできました」などとと言いながらやるようにしてください。

このようにマジックでは、ひとつのセリフが抜けただけでも、クオリティが著しく低下する場合があります。

ノンストップトリック

= 加藤英夫、1997年12月23日 =

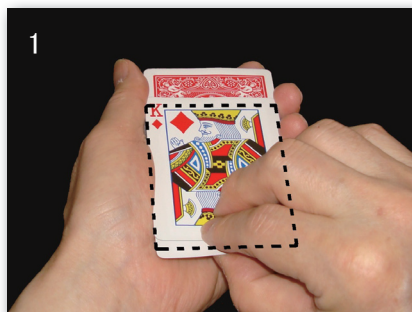
ヘンリー・クリストの'ストップトリック'では、表向きに返したカードをいったんデッキのトップにそろえる動作が必要です。私はこれが気に入りませんでした。なんとかスムーズに相手のカードをトップにアディションできる方法がないかと考え続けました。けっきょく手の操作ではなく、'引力'によって解決することができました。

* 方法 *

相手のカードをトップから2枚目にコントロールします。トップカードを表向きにするとき2枚目の下にブレイクを作り、ブレイクの上の2枚を他のカードより3cmぐらい手前に置きます。

つぎのカードを抜いて表向きに返し、1枚目の上のにせますが、ぴったり置くのではなく、1枚目よりも5mmぐらい前に置きます。

2枚目をそのように置いたとき、右親指先で選ばれたカードを2、3mmほど前に押しします。図1。



「このようにカードを表向きにしていきますかすら、好きなところでストップをかけてください」と言って、ストップがかかるまで表向きにしていきます。そのとき重要なことは、左手を45度ぐらい観客の方に傾けて行うということです。左手の人さし指をデッキの前エンドに当てています。

ストップがかかったら、表向きにしたカードの手前エンドを右手でつかみませんが、少し前にずれている相手のカードには触れてはいけません。右手でつかんだカードを少し持ち上げて、左人さし指に当たるまで前方に運びますが、そのとき左手はカードを持っている力をゆるめます。

そうすると、自然に相手のカードはトップにそろいます。図2。



右手のカードをテーブルに置きます。そしてトップカードを指さして、「ここでストップがかかりました」と言います。相手のカードを名乗らせ、その相手のカードを表向きにして見せます。

マルローのバリエーション

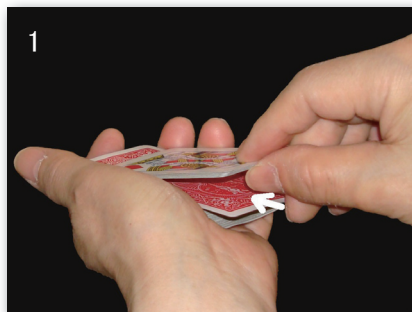
= エドワード・マルロー、雑誌“イビデム”、1959年10月 =

ヘンリー・クリストのストップトリックのバリエーションとして、私の方法とは異なりますが、表向きのカードを取り上げる動作の中で、相手のカードを裏向きのカードにそろえてしまうという方法を、エド・マルローが書いているのを見つけました。

マルローの方法では、私の方法のように相手のカードをずらしておくのではなく、手前にずらして置いていくカードと、その下にある相手のカードの間にブレイクを作っておきます。

* 方法 *

ストップがかかったら、ブレイクより上の表向きのカードの右手前コーナーを右親指と人さし指でつかみ、それらを取り上げるときに中指の先で相手のカードを前に押して下のカードとそろえます。図1。左手を少し傾けて行うことにより、相手のカードのずれが見えないようにします。



サイコロジカルストップトリック

= ジーン・ヒューガード解説、エンサイクロペディアオブカードトリックス、1937年 =

サイコロジカルストップトリックとは、ディール中に相手にストップをかけさせる、もしくはストップさせるタイミングを、心理的に誘導する手法を使って、選ばれたカードをストップされた位置から現す‘ストップトリック’です。‘サイキックストップトリック’と呼ばれることもあります。原著から翻訳しておきます。

このトリックは成功率が約97%ですが、成功したら奇蹟に近いカードマジックです。ポール・ノフケは賢明なカーディシャンですが、彼の手にかかると成功率は100%です。題名が示すように、これは心理的にトリックであり、マジシャンがいかに相手にディールのやり方を説明するかにかかっています。

* 方法 *

シャフルされたデッキから相手に1枚のカードを抜かせ、相手はそのカードを見ているとき、密か

に9枚のカードをサムカウントして落とします。落とした9枚より上のカードをキックして左手に取り、その上に相手のカードを返してもらい、その上に右手の9枚をのせてそろえます。そのあとトップ10枚が保たれるようなシャフルを行います。

デッキを相手に渡し、1枚ずつあなたの手でディールするように指示します。3枚目が置かれたとき、「もう少し早く」と言って、さらに5枚目が置かれるまでに、「どこでもストップしてください」と言います。

このようなタイミングで進めると、相手は9枚か10枚を置いたところでストップします。あとは10枚目のカードを表向きにさせて、相手がそのカードを見つけた、というように表現することです。

相手が9枚置いてストップしたとしたら、「つぎのカードを表向きにしてください」と言います。10枚置いたところでストップしたら、あなたの左手を伸ばして、「ではこのカードを表向きにしてください」と言います。

もしもストップが10枚を越えた場合は、その枚数をおぼえておいて、サイドスチールしてトップから現します。

* 備 考 *

私はこの方法を読む以前に、自分で考えて似たようなことをやっていました。ただし相手にディールさせるのではなく、自分でディールします。成功率が97%であると大胆なことは言いませんが、少なくともほとんど失敗しない、とは言えます。

私の場合、「このように1枚ずつ置いていきますから、どこかでストップをかけてください」と言いますが、「このように」で1枚目を置いて、「かけてください」のセリフの最後で3枚目を置くというのを、3枚を均一の速度でタイミングを合わせながらやります。

そして4枚目は比較的早く置きます。そして5枚目からゆっくり置いていきますが、5枚目を置くときに相手の口が動きそうか否かを判断します。動く気配があればそのままの速度でディールを続け、気配がなければ5枚目をゆっくりと置き、そのあとさらに速度を遅くしていきます。

カードを取るのと置くのとで重要なことは、置くのと取るのは続けてスピーディにやるということです。5枚目以降ゆっくりディールすると言っても、ゆっくりさせるのはカードを取ってテーブルの山に運ぶのをゆっくりやるということです。置いたらすぐにつぎのカードを取るのです。

置いたあとに取るまでに間をあげたとしたら、5枚目を置いた直後にストップがかかったとき、まだ右手が6枚目にかかっていなければ失敗です。ですから、5枚目を置いたらすぐ6枚目を取り、そしてそれをゆっくりと置くのです。7枚目を置いてもストップがかからなかったら、8枚目はすぐ取らず、ゆっくり取りにいくようにします。そして8枚をゆっくり運び、置くまえにストップがかかったら、

8 枚目を左手のカードの上に戻します。

失敗はストップが早すぎて起こることはまずあり得ません。あるとしたら、8 枚目以降を置くまでストップがかからない場合です。

そのようなケースについてエドワード・マルローは、著書“サイドスチール”の中で、マルローの‘ボードストップトリック’という題名で、マルローの‘ボードスチール’という技法を使う対処法を書いています。

7 枚目を置くときに、少しインジョグさせて置きます。そしてそのあとのカードはインジョグが目立たないような置き方をします。

ストップがかかったらデッキを置き、ポケットを取って、インジョグをブレイクに変え、左小指でブレイク上のカードをサイドジョグさせます。

そしてナート・ライプチヒの‘ユビキタスカード’のときのように、ジョグしたカードを右方に抜いて、カードそろえる動作でポケットのトップに置き、そしてそのカードを現します。もちろんトランスファーの動作を行うときは、適切なセリフをしゃべりながらやります。

なお上記の技法は、カードをパームしないでスチールして移す技法として、ナート・ライプチヒがすでに同等の技法を 1909 年の時点で使っていたのですから、マルローのオリジナルとは言えないと思います。

オールモストパーフェクトストップトリック

= エドワード・マルロー、雑誌“ニュートップス”、1979 年 1 月 =

* 方 法 *

トップから 2 枚目のカードを表向きにしておきます。

表向きのカードを見せないようにカードを広げ、1 枚のカードを抜かせます。相手がそれをおぼえているうちに、デッキをまん中からカットして、間にブレイクを作ります。

カードを広げて、ブレイクのところから分けてそこに相手のカードを返させます。そしてカードを閉じるとき、相手のカードの上 4 枚の上にブレイクを作ります。ダブルアンダーカットすると、相手のカードはトップから 5 枚目にきます。デッキをテーブルに置きます。

トップから 3 枚取るまでに「このようにカードを 1 枚ずつ取っていきますので、好きなところでストップをかけてください」というセリフを言い終えます。そしてストップがかかるまで取っていきますが、5 枚目の相手のカードの下にブレイクを作ります。5 枚目でストップがかかればそれで OK。

6枚目を取るときは、2枚を取って5枚目の上にのせます。7枚以上取ってからストップがかかったとしても、最後のカードを右手で取り「このカードでいいですね。あなたのカードは何でしたか」とたずね、相手が答えているうちに右手のカードを左手のカードの上にのせ、ブレークより上のカードをいっしょに表向きに返し、すぐ左親指でいちばん上の相手のカードをテーブルに落とします。

* 備考 *

私の経験では、相手のカードが6枚目にあった方が、タイミングが合わせやすいと思います。

マルローは6枚目でダブルで取るやり方を具体的に書いていませんが、もしかするとマルローはツバで2枚のカードをくっつけていたのではないかと推測されます。というのは、2枚を取るときに”ダブルリフトせよ”とは表現しておらず、”つぎに即席のダブルバックカードを取ります”と書いているからです。

このトリックの重要なポイントは、相手のカードを表向きに返した直後に、そのカードをプッシュしてテーブルに投げ落とす、ということです。このスムーズな動作によって、ストップされたところから相手のカードが出てきたように見えるのです。この部分の良さが生かされなければ、このトリックを行う意味はありません。

このトリックはナート・ライプチヒがダブルバックカードを使って行っていた方法を、ダブルバックカードを不要にしたバリエーションであるとマルローが述べています。ダブルバックカードを使えば、相手があなたの左手にカードを渡していく、というやり方が可能です。

ストップ&チェンジ

= 加藤英夫、カードマジック研究日記、2002年10月28日 =

これはジーン・ヒューガードの”エキスパートカードテクニック”に書かれている、’テレパシフィックカード’を読んで考えたものです。原案ではクアドラプルターンオーバー(4枚のカードを1枚のごとくひっくり返す)を10回前後連続して行うという、とてもやる気の起きないものでした。

それをトリプルターンオーバーでできるようにしたのですが、試しに4枚と3枚のターンオーバーをやり比べてみてください。1枚の違いでかなりの違いを感じます。いずれにしても、トリプルリフトの方がベターであることは間違いなくと思います。

ヒューガードは解説の前書において、そのトリックがアンネマンの’イニシャルドカード’を改良したものだとして述べていて、しかもアンネマンの方法ではトリプルリフトとダブルバックカードを使っていると述べているのです。私はアンネマンのその作品を見つけられなかったため、なぜ4枚をひっくり返すやり方が改良なのか理解できませんでした。アンネマン作品については後日わかりました。その作品についてはつぎに書きます。

* 方 法 *

あらかじめボトムカードをリバースしておきます。デッキを両手の間に広げて1枚抜かせます。相手がカードを見ている間にカットして、表向きのカードの上にブレイクを作ります。相手からカードを受け取り、手前からブレイクの中に入れて、相手のカードがトップにくるようにダブルカットして、そのあとトップの2枚を保ってシャフルします。

「これからお見せするのは、あなたのカードではないカードをあなたのカードに変化させるというマジックです。このようにカードを1枚ずつ表向きにして置いていきますから」と言いながら、トリプルターンオーバーして、上の表向きのカードをテーブルにディールします。なお、ターンオーバーするときにつぎのカードの下にブレイクを作り、つぎのトリプルターンオーバーの準備をしておきます。「好きなところでストップをかけてください」とセリフを続けますが、それまでに2枚目のカードをディールするようにします。

トリプルターンオーバーしてディールするというのをストップがかかるまで続けます。奇数枚でストップがかかった場合と、偶数枚でストップがかかった場合とでは続け方が違ってきます。

奇数枚の場合

いまトップから2枚目に選ばれたカードが表向きになっています。トップカードを指さして、それではこのカードをあなたのカードに変化させます」と言って、そのカードを右手で取って前に運びますが、そのとき左手は手前に返して表向きのカードが見えないようにします。その動作において、右手で取るカードは、あくまでも裏面が水平に保たれていて、ストップがかかったところのカードであることが不明確にならないように配慮してください。

右手のカードを表向きにして「これは〇〇の××です」とそのカードの名前を言います。そしてそのカードを表向きにデッキのトップに置きますが、トップにあった表向きのカードが露見しないようにします。右手のカードが上に置かれるときに、同時にデッキを水平に戻すようにすればよいのです。

トップカードの表がよく見えるように、少しデッキを観客の方に倒して持って、トップの2枚をダブルターンオーバーし、そして上の1枚だけを右手に取ります。相手のカードを名乗らせてから、そのカードをぐるぐるまわして魔法をかけ、そして表向きにします。

偶数の場合

いまトップに裏向きの選ばれたカードがあり、その下に表向きのカードがあります。「それではこのカードを選ばれたカードに変化させます。あなたのカードは何でしたか」とたずね、トップカードに魔法をかけます。そしてトップカードを裏面がつねに見えるように右手に取り、同時に左手は表向きのカードが露見しないように手前に返しなが、右手のカードを前に運び、表向きにします。

右手のカードを表向きにデッキのトップに置きますが、表向きのカードが露見しないように行います。そしてダブルターンオーバーします。

* 備 考 *

というわけで、トリプルリフトがスムーズにできる人にとっては、十分実演価値のあるマジックであると思います。ただし一対一のような近接距離で演ずるのには向いていないのは明らかです。トリプルターンオーバーを行うときは、なるべくカードの面を観客の方に傾けて行うとよいでしょう。その方が厚さを感じさせないと同時に、カードの表面をよく見えるようにすることができます。

ストップ！

= セオダー・アンネマン、“ストレンジシークレツ”、1932年 =

前述の‘ストップ&チェンジ’をサイトにアップした翌日、竹中朋生さんから、つぎのようなメールをいただき、アンネマン作品のことがわかりました。

今日の研究日記に書かれた内容で、ヒューガードの‘The Telepathic Card’の原点について、関連があるかと思われることを、僭越とは存じますがお知らせします。

松田道弘氏の著書“ミラクルランプマジック”において、題名は‘イニシャルドカード’ではなく、‘ストップ!’となっていますが、同じような内容のアンネマンの作品が紹介されています。これは、「ストレンジ・シークレツ」(1932年)という本に最初に載ったそうで、ヒューガードの“エンサイクロペディアオブカードトリックス”に転載されるときに、‘イニシャルドカードテレバシー’という作品名になったということです。

このあと、マックス・アブラムズ著の“アンネマン、ライフ&タイムズオブアレジェンド”(1992年)を調べて、アンネマン作品がつぎのようなものであることがわかりました。

デッキの中にダブルバックカードを入れておき、結果的にトップに選ばれたカード、2枚目にダブルバックカードがくるようにコントロールします。「あなたのカードを好きな枚数目に現します」と説明し、相手に15までの好きな数を言わせます。奇数ならそのまま、偶数ならトリプルターンオーバーを行い、「このようにカードを表向きにしていって、あなたの選んだ枚数目にあなたのカードを現します」と説明します。そして表向きにしたカードを裏向きにしてデッキのまん中へんに入れます。

それからトップ部分を保ってシャフルします。トップカードを指さして「これが1枚目です」と言ってトリプルターンオーバーを行い、そのあと相手の言った枚数目の手前までトリプルターンオーバーを繰り返します。そしてその枚数目のカードを指さして「これが〇枚目のカードです。あなたのカードは何でしたか」とたずね、そのカードを表向きにします。

ダブルストップ！

= 編案：加藤英夫、2012年5月28日 =

アンネマンの 'Stop!' でよくないのは、相手に数を言わせてから、偶数の場合に前述のように説明しながらひっくり返し、1枚をデッキの中に入れるということです。このときに枚数を調整したと思われたらザッツオールです。

そもそも相手に枚数を言わせてからディールするのがよくないと思います。その点をヒューガードは直していました。1人目の客に1～10の好きな奇数を思わせ、その数を言わせることなく、その枚数を置いたときにストップをかけさせます。2人目の客には1～10の偶数を思わせて、その枚数の1枚手前のカードを置いたところでストップをかけさせます。そうすると自動的に、ストップがかかったときに、選ばれたカードは左手のトップにありますから、トップから選ばれたカードを現します。

たしかにヒューガードがそのように変えた点は、アンネマンの致命的弱点を改善していることは認めますが、だからといってまだまだ弱点が残っていると思います。2人に奇数と偶数を言わせることに何かの理由付けをする必要があります。ヒューガードはたんに、1人目には奇数を思わせ、2人目には偶数を思わせる、としか書いていません。

そもそもダブルバックカードを排除したのは改良ではなく、あきらかに改悪です。4枚返し続けるのが、観客から見て3枚返し続けるのより優れているはずがありません。仕掛を排除してノーマルカードでできるようにしたやり方が改良と言えるのは、それが観客から見た目に同等以上に改善されている場合のみです。

そして私がアンネマンのやり方でもヒューガードのやり方でも良しとしないのは、思っている数の1枚手前でストップしてくれということ。そんなやり方よりも、ストップがかかったところで、左手のトップカードを表向きにしたら選ばれたカードであった、という方がよほどドラマチックです。というわけでアンネマンとヒューガードのやり方の良い点をうまく組合せて、このトリックを構成いたしました。

* 方法 *

選ばれたカードをデッキに戻させて、シャフルやカットを行った結果、トップから、何でもよいカード、選ばれたカード、ダブルバックカードとなるところまで進めます。そこまでのやり方は自分で決めてください。

「お客様に数を選んでいただきますが、わざと難しくするために、2人の方に選んでいただくことにいたします。数には奇数と偶数がありますが、まずあなたには1～10の好きな奇数を心の中で決めてください。言わないでください。あなたには1～10の好きな偶数を心の中で決めていただ

きます。決めましたか。ではやりましょう」と言います。

トップカードを右に押し出して、右手で左に返して表向きにすると、下の3枚も少しずらして、トップカードが返った時点では、上から4枚目の下にブレイクを作ります。表返した1枚をテーブルに落とします。

いま上から3枚目の下にブレイクがあります。以下、ブレイク上の3枚をひっくり返すのを、1人目の客がストップをかけるまで続けます。返したときにつぎのカードの下にブレイクを作ることは、アンネマンのトリックと同様です。

1人目が終わったら、2人目に対して同じことを続けます。ストップがかかったとき、選ばれたカードはトップにあります。「もしもこのカードが選ばれたカードなら、成功したことになります。選んだカードは何でしたか」とたずねます。そしてそのカードをドラマチックに表向きにして見せます。

*** 備 考 ***

ここまで読んできて、トリプルリフトを続けることに無理があるのでは、と感じている方もいるかと思います。たしかに正面を向いて、カードのエッジを観客の方に向けてトリプルターンオーバーを繰り返すのは無茶というものです。あくまでもこのトリックは立って演じるものであり、体を45度ぐらい左に向けて、しかもデッキの面を観客の方に傾けて行うべきです。

客の思っている数をマジシャンは知らないのですから、ストップがかかったところに選ばれたカードが現れるのは、十分に不思議さを生み出します。

あなたのひらめき

= 加藤英夫、2012年10月3日 =

*** 方 法 ***

相手にシャフルさせたデッキを受け取り、「私が後ろを向いているときにやってもらうことを説明します。このようにカードを1枚ずつ置いていって」と言ってディールをスタートし、4枚置くまでに「好きなところでストップしてください」と言います。

「ストップしたところのカードをこのように見ておぼえ、もとに戻したら、残りのカードを上重ねてそろえてください」といセリフに合わせて、すべてセリフの通りのことをやります。見たカードをキーカードとして記憶します。

デッキを相手に渡し、後向きになり、説明したことをやってもらいます。そして前に向き直ります。「念のためカードをカットしてください」と言って、デッキを何回かカットさせます。

デッキを受け取り、表を自分に向けて広げ、「あなたがおぼえたカードを当てるのですが、候補のカードを10枚抜き出します」と言って、キーカードを見つけ、それより4枚手前が相手のカードですから、相手のカード以降の10枚をアップジョグして抜き出し、他のカードはわきに置きます。

10枚のカードを裏向きにビドルグリップに持ち、「この10枚のカードのどれかがあなたのカードだということには確信があります。しかしどれがあなたのカードか当てるには、あなたのインスピレーションをお借りします」と言います。そのようにしゃべりながら、トップカードを引くべくトップカードに左親指を当てるとき、ボトムカードをほんの少し右にずらします。

トップカードを左手で引いて、右手のカードをで表向きに返し、「このように1枚ずつ表向きにしていきますから、好きなところでストップをかけてください」と言います。

1枚ずつ表向きに返していき、ストップがかかったら、「ではこのカードは裏向きのまま取ります」と言って、つぎのカードを引いて取りますが、そのとき右にジョグしているカードもいっしょに取ります。取った上のカードの下にブレークを作ります。

「残りのカードは表向きにします」と言って、つぎのカードを引くときにブレーク上の1枚を右手のカードの下にスチールバックします。そして引いたカードを表向きに返します。残りのカードをもすべて取ってから表向きに返します。

10枚を表向きにリボンスプレッドします。そして「私はこの10枚の中にあなたのカードがあると確信しているといいました。表向きのカードの中にありますか」と問いかけます。相手は否定します。

「ということはこのマジックがうまくいったということです。あなたのカードは何でしたか」とたずねます。それから裏向きのカードを抜き出して、それが相手のカードであることを見せます。

サンズオブタイム

= ポビー・バーナード、雑誌“ペンタグラム”、1955年3月 =

* 現象 *

相手に1枚のカードを選ばせ、デッキに戻させてから、デッキを相手に何回かカットさせます。砂時計を取り出し、それをひっくり返すと同時にマジシャンはディールをスタートします。砂が落ちきったときに客がストップかけ、マジシャンはそこでディールを止めます。最後にディールされたカードを表向きにすると、それは相手の選んだカードです。

* 方法 1 *

スベンガリデッキを使います。それだけでやり方が理解いただけますね。

*** 方法 2 ***

ショートカードをフォースし、相手がデッキをカットもしくはシャフルしたあとに、それをトップに運び、あとはセカンドディールを行います。ストップしたところから相手のカードを出します。

*** 備考 ***

方法が面白くありませんが、演出としては秀逸です。つぎに解説する私の方法の原点ともなりましたので、収録することになりました。

砂時計は語る

= 加藤英夫、2000年12月16日 =

この方法を使う場合は、砂時計が落ちきるまでに、平均的に何枚のカードがディールされるかを調べておく必要があります。20枚であるとしめます。

*** 方法 ***

1枚のカードを選ばせ、何らかの方法でクリンプします。デッキをシャフルさせたあと、クリンプカードがトップから24枚目ぐらいにいくようにカットします。

クリンプカードの上のカードの上にブレイクを作ります。相手に砂時計をひっくり返させてディールをスタートし、砂が落ちきる寸前にきたら、ブレイク上のカードすべてをマルチプルディールします。スラップトリックと同様です。そしてすぐにつぎのカードを取ります。そのカードを置いたときにストップがかかるのが理想的ですが、つぎの相手のカードを置いてそのつぎのカードを取りに行くまでにストップがかかればよいので、許容範囲はかなりあります。

いずれにせよ、相手のカードのところでストップがかかったことを強調し、相手のカードを名乗らせてから表向きにします。

フォーゴットウントリック

= ハワード・シュワルツマン、雑誌“マジックマニユスクリプト”、1983年10/11月 =

これはシュワルツマンが書いていますが、備考において、これはジョン・スカーニが得意としていたと述べているものの、考案者は特定していません。題名から推測できるように、古くからあるトリックのようです。

* 方法 *

相手に選ばせたカードをトップにコントロールします。表を観客に向けてデッキをプレッシャファンします。ファンの上を右手の人さしで右から左に指でなぞっていきますが、そのとき親指でトップカードをいっしょにずらしていきます。図1。そして相手に好きなところでストップをかけさせます。



ストップがかかったら、ファンのその部分のカードを引き出します。半分ほど引き出したとき、親指で相手のカードを引き出して後ろにそろえます。図2。カードをそろえるまでは後ろのカードを右手でカバーします。



2枚のカードをそろえて引き出し、相手のカードだといいます。相手が違うと思ったら、驚く表情をしますが、そのやりとりの最中にファンと右手のカードをを水平にして、ファンで右手のカードを一瞬おおい、2枚のうちのフェースの1枚をファンの陰にスチールします。

相手のカードをたずねてからから、右手のカードを見せます。

* 備考 *

相手のカードをボトムにコントロールして、相手に表を向けて行えば、ダイレクトに相手のカードを抜き出すことができます。

2枚重ねて引き出さずに、1枚をそのまま引き出すやり方もできますが、うまく重ねて引き出したやり方に比較すると、効果が落ちます。

ストップファンディスカバリー

= ジョージ・キャプラン、“ファインアートオブマジック”、1948年 =

* 方法 *

スペクテイターピークによって1枚のカードをおぼえさせ、それをグリップしたあと、デッキを相手に渡してシャフルさせます。カードを受け取り、表を上にして大きくファンに広げて左手に持ちます。このとき、相手のカードが右から4分の1ぐらいの位置にくるようにします。いちど広げて位置を確かめ、ずれが大きい場合はカードを閉じ、カットしてから広げ直します。

右手の人さし指の先をファンの縁の左端にあて、ゆっくり右に向かってずらしていき、「好きなところでストップをかけてください」と言いますが、指がファンのセンターにくる寸前にこのセリフが終わるようにタイミングを合わせます。そして指を動かし続け、相手のカードの左のコーナーに近づいたら少し速度を落とし、なるべく相手のカードの左コーナーでストップがかかるようにします。

少し手前でストップがかかったら、「あっここでいいですか」と言いながら相手の顔を見て、その動作のときにも指を少し進めます。

もしも左のコーナーを過ぎてもストップがかからなければ、こんどは右の端でストップがかかるようにタイミングを合わせます。いずれの場合でも相手のカードを上を引き出し、相手のカードを名乗らせてから、そのカードを抜き出して、表を見せます。

* 備考 *

原著にか書かれていませんが、目的のカードの左端や右端でストップした場合は、コーナーをつかんで抜き出しやすいのですが、途中でストップした場合は、つぎのようにすれば抜き出せます。

図1のように、目的のカードの手前のカードのコーナーから親指の先をさし入れて、親指で目的のカードを引き出します。



いちどファンに広げてから、選ばれたカードの位置を見てやり直すのは好ましくありません。ピークの代わりに、アップジョググリップを使えば、表を見ないで選ばれたカードを適切な位置にカットすることができます。

’後向きのカード当て’のフィネス

= 加藤英夫、2012年10月4日 =

“Card Magic Library”第9巻、35ページに’後向きのカード当て’が解説されています。それ自体は’ストップトリック’に分類できるものではありませんが、つぎに解説する’スペクテイターズストップ’の土台になるものですので、ここで’後向きのカード当て’の改善点を説明しておきます。原案を忘れていた方は、先に原案を再読してください。

* 改善点 1 *

デッキを表向きにリボンスプレッドしたときに、キーカードの認知するところまで、原案の解説通り進めます。

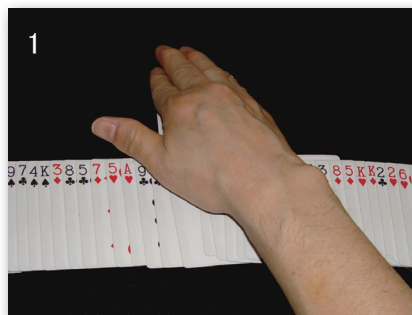
そして左向きになって、右手の人さし指でスプレッドの上を動かすのですが、そのとき、体の位置を調整します。すなわち、テーブルに対して左向きに立ったとき、右腰が選ばれたカードのある位置に立つのです。

その位置に立てば、右手を左右に動かしたときに、右腕がスプレッドに対して直角になったときに、人さしは選ばれたカードの上空にあることとなります。ですから、より正確に選ばれたカードの上空で止めることができます。

* 改善点 2 *

原案では、右手を選ばれたカードのある上空で止めたあと、すぐ選ばれたカードを押し出して当てています。その部分のインパクトを強めるための改善点です。

振り向いたらすぐ人さし指を選ばれたカードのインデックスの上に落とし、「このカードです」と言います。そして人さし指でそのカードを前に押し出すとき、他の指も伸ばして、図1のように、そのカードが見えないようにするのです。



完全に前に押し出したら、「あなたのカードは何でしたか」とたずね、それから右手をどけてカードを現します。

スペクテイターズストップ

= 加藤英夫、2012年10月4日 =

前述した‘後向きのカード当て’のやり方通りに演じれば、つねのあなたの腕がスプレッドに対して直角になったところに選ばれたカードがあることになります。そのことを利用して、自分ではなく、助手にストップをかけさせて当てるやり方です。

* 方法 *

助手には、あなたの腕がスプレッドと直角になったときにストップをかけてくれと頼んでおきます。もちろん練習して確認してきましょう。

助手には後向きになってもらい、客にカードを選んでおぼえさせ、デッキに戻させて、デッキを表向きにリボンスプレッドした状態で、前に向き直らせます。

「このようにカードの上で指を動かしていきますから、適当なところでストップをかけてください」と言って、前を向いたまま指を左から右に動かし、助手には中央を少し過ぎたところでストップをかけさせます。

「では本番です。本番では、私はカードの方を見ないでやります」といって、スプレッドの上で指を動かします。助手はあなたの腕がスプレッドと直角になったところでストップをかけます。

あとは、前述の‘後向きのカード当て’と同じやり方でカードを前に押し出し、選んだ客に名乗らせてから、右手をどけて選ばれたカードを現します。

スペクテイターズストッププラス

= 加藤英夫、2012年10月4日 =

“Card MagicLibrary” 第7巻、174 ページに、‘後向きのストップカード’が解説されています。あなたがカードをディールしていくとき、後ろを向いた助手がストップをかけます。ストップがかかったところから選ばれたカードが出てくるというマジックです。スタートして一定秒数後にストップをかけさせるというアイデアを、‘スペクテイターズストップ’と組み合わせると、超弩級のマジックが出来上がりました。

* 方法 *

ストップをかけさせる助手には、最初から最後まで、後向きになったままにさせます。

スプレッドの上をなぞるとき、「ではやりますよ」と言う言葉に対して、密かに時計を見ている助手

は、秒針がある秒をさしたその時に「はい」と返事をします。

そこでマジシャンは右手を動かし始め、3秒後に選ばれたカードの上に位置するタイミングで動かします。助手は時計を見て、3秒後にストップをかけます。

あとは'スペクテイターズストップ'と同じです。

ストップインザダーク

= 加藤英夫、2012年10月4日 =

* 現象 *

選ばれたカードがデッキに返されてシャフルされたあと、マジシャンはデッキを相手に渡して後向きになります。相手がデッキをよくシャフルします。マジシャンは背後に手を伸ばし、その上に相手がカードをディールしていき、マジシャンがストップをかけます。そして前に向き直りますが、左手のカードは見えたと状態のまま前に出します。そして相手のカードを名乗らせてから、左手のトップカードを指さして、「私はこのカードが置かれたときにインスピレーションを感じました。あなたのカードはなんでしたか」とたずねます。そのカードを表向きにすると選ばれたカードです。

* 方法 *

何らかの方法で選ばれたカードをパームしてスチールし、相手にデッキを渡し、後向きになります。

相手にデッキをシャフルするよう指示するとき、パームしているカードを上着の左袖に入れます。

袖の中にカードが落ちないように左手を背後にまわし、左手の上にカードをディールさせます。かなり置かれたらストップをかけます。

右回りで前に向き直り、右手で相手の方をさしながら、「あなたが選んだカードは何でしたか」とたずねますが、そのとき左手を下げて袖の中のカードを左手のカードのトップに受け止めます。相手が答えているときに、左手を前に出します。そして左手のトップカードを指さして、「このカードを見てみましょう」と言って、そのカードを表向きにします。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 12 号

発 行 2013 年 4 月 7 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

